

愛媛面影

田

ル 4
4311
4



門 4
號 4311
卷 4



愛媛面影卷四

○久米郡

今治 半井法橋梧菴撰

日本書紀清寧卷曰二年冬十月遣於播磨國司山部連先祖伊與
来目部小楯於赤石郡縮見屯倉首忍海部造細目新室見市邊
押般名皇子子億計弘計畏敬兼抱思奉為君奉養甚謹以私
供給便起柴宮權奉安置乘驛馳奏天皇愕然驚歎良以捨
懷曰懿哉悦哉天垂博愛賜以兩兒是月使小楯持節將左右
舍人至赤石奉迎

日本書紀卷四

自吾...

早稲田大學圖書館
第31.1.31
藏書



同頭宗卷曰二年冬十一月播磨國司山部連先祖伊與未目部
小楠於赤石郡親辨新嘗供物

國造本紀曰久味國造輕島豐明朝神魂尊十三世孫伊与主命
定賜國造

大成云味疑昧誤字

按未目部小楠之久米郡より出づる久米も来目も同一
假字にて固り別りしなり古事記傳十九卷大久米命の云は
云来目邑八和名抄は和國言市郡久米郷なり是也云々して
伯耆美作伊豫等も久米郡と云り其餘も國々此地
名の多しなり八皆本八此氏より出づるものなり伊豫國入浮穴直千経

千経之先大久米命也ト云は伊豫國浮穴郡ニ在リ久米郡の
りも由有るむを云はるるもあつたなり

和名抄郷名

天山郷

吉井郷

石井郷

餘戸郷

若ハ此四郷ありしを後世に拾一村より分ちたる

和泉村 五百八十八石

井門村 四百五十五石

浅生田村 四百八十六石

古川村 五百八十八石

居相村 四百五十五石

石井村 八百九十石

土居村 三百三十二石

今在家村 二百五十五石

星岡村 五百七十七石

尾山村 百石

福音寺村 二百五石

久米村 五百七十七石

鷹子村 五百八十五石

出戸村 九百二十石

日瀬里村 二百六十九石

假屋村 四百五十五石

平井合村 七百五十五石

小屋峠村 四百三石

梅木村 千九百九石

畠中村 四百石

窪田村 二百廿石余 水泥村 五百廿石余 西岡村 五百廿石余 志津川村 四百八石余
 樋口村 三百廿石余 芝内村 三百廿石余 北方村 千二百七十九石余 松瀬川村 二百七十六石余
 南方村 千三百石余 則内村 六百九十三石余 川之内村 二百廿石余
 總高壹萬五千七百九拾石二斗五升七合

○ 天山 あまやま

天山郷の特立してよれ山と同く寸低き山あれも 畝尾長引くちこれ形容方和国天香具山の似る此山はよよとて郷名はあひらあぶ一此山上右天よまろしと二よまれて地下はあぬまろしとハ大和天香具山とあてまろしハ伊豫國の降きて

此處より海は是よりて天山と名つてしり

伊豫風土記云伊豫郡自郡家以東北在天山所名天山由者倭在天加具山自天降時二分而以片端者天降於倭國以片端者天降於此土因謂天山也

按天山今久米郡に在りしを風土記は伊豫郡とすハ昔ハ此辺まで伊豫郡とす一奉ふ一神社あるハ後人の疑

○ 伊豫村神社 いよむらのむらじま

延喜式は伊豫郡伊豫神社名神大とす是也但久米郡ありを式は伊豫郡とすハ古此所も伊豫郡とすハ詳を

御社之系 米郡居相村之立せり俗に伊豫中大明神と云

按俚諺集云此神社昔ハ梅本村の内小野谷ニ鎮座也中世洪

水ニ漂流寸當社ハ立淵ニて川上ニ移されり此處ニ遷

坐ニ奉り伊豫村大明神ト崇むト云々其ノ二十四社考

ニ伊豫村神ヲ誤りて伊豫豆比子神トせり云々近世伊豫

豆比子神社ト定ルハ非有ニ延喜式ニ伊豫神社名神大

ト云リテ類聚國史ニ伊豫村神預於名神ト云々云々

此伊豫村神ハ正ニ伊豫神多證一也云々名神ハ後世も

必大社ト云々此御社ト云々大社多證ニ名神多證

誤ニ也又續日本紀ニ久米郡伊豫神授從五位下亮神三烟

と有て即久米郡なる名神ハ伊豫神社多證三也云々著一記

誤り云々ハ速ニ神号ト改むべき事ヲ抑此神ノ御事ハ云々以

て疑ハク思フ此度此書著すは神ノ誤ニ云々云々深ク

考へざる由ニ神ノ助有て考へたる證有ればゆめ疑ハク

伊與豆比子神社ハ伊豫郡ニ在り云々云々後云々

郡郷ノ事ハ古書ニ違リト云々云々延喜式民部云

九郡不得過千戸若餘五十戸以上者分隸比郡地勢不冝分者

隨狀立別郡其不滿百戸者隸入他郡若不得已而應分者別

録申官ト云々彼此入易ト云々有れば是云々久米郡

ある天山と風土記ニ伊豫郡ト云温泉郡ある温泉のものと凡記

後援乃面シテ口



伊豫高根

星岡

伊豫の
 天山
 松菴
 芳也
 海
 舟
 山

白岳



天山

大成

香山
 舟
 山
 舟
 舟
 舟

白岳

白岳

碑文序道逢夷與村正觀神井とて思かふ

續日本紀高野卷曰天平神護二年夏四月甲辰久米郡伊豫神授ケ從五位下ヲ充ミ神戶二烟ヲ

按新居郡伊曾乃神充ツ神戶五烟ヲ越智郡大山積神充ツ神戶五烟ヲ久米郡伊豫神充ツ神戶二烟ヲ野間郡野間神充ツ神戶二烟ヲ名神ノ乃ハ率スあり

三代實錄曰貞觀四年九月十八日甲申授伊豫國從五位上伊豫村神ニ從四位下ヲ

同八年閏三月七日壬子伊豫村神授正四位下ヲ
同十二年八月廿八日戊申授伊豫村神正四位上ヲ

類聚國史百三十一曰天安八年閏三月壬子伊豫國從四位上磯野神伊豫村神並預於名神

按舊蹟考云三代實錄卷十四云伊豫國正六位上伊方神授從五位下ト而テ頭書ニ方當作豫ト方ハ方ノ誤ト云リ然レも伊豫神天平神護二年已ニ從五位下ト授給ヘハ實錄ニ以テ正六位上ト伊方神ト以テ神トありハ伊方神ノ誤トハハ也

○日尾八幡宮
久米村ニ在リ宇佐ノ近坐シて右大將賴朝公建立也ト以テ應永年中ニ燒亡寸今三藏院寶物長二尺許ノ板ハ八幡宮並ニ久米村ニ在リ宇佐ノ近坐シて右大將賴朝公建立也ト以テ應永年中ニ燒亡寸今三藏院寶物長二尺許ノ板ハ八幡宮並ニ

與正月八日の夜岸村の薬師堂に神幸所を里民松明を照して供奉すに俚諺集に見えりて

按俚諺集に伊豫神社ハ久米村日玉山に遷坐し奉承今日日尾八幡是ありと云る伊豫神社ハ即伊豫村神社として別

○淨土寺

栖林山三藏院と号く本号釈迦如来行基作真言宗四国四拾九番の順拜にありて三月十七日新羅國對四外工點

俚諺集云孝謙天皇の勅願所として右大将頼朝公再興の由河野通信在判の證文数通有りと應永年中の災に悉く焼失す河野伊豫守通篤制札の條目今に残りて西に六拾六坊有りと寺内八町四方と云る又堂山とて墓所あり空也上人自作の木像有りと今に此に安置しりて上人諸国修行の時寺に三年滯留ありしを此に圓光大師自作の像二世聖光上人三世良忠上人より自作の三像有りとて三像院とも名くこと也

○播磨塚

同所に在り昔石室数多ありと今に残りありて曠野平為ることいふことありとありて人皇廿三代清寧天皇御世伊豫國人末目部

小楯より之播磨守を彼國に至り顯宗仁賢二帝を供奉せ
上洛す後任滿て此の館を送りて任多す其の播磨守
りて但該館を見えり

按菅笠日記に陵の状とありて窟のやうにして内は狭く下は
埋れり其の蓋のやうにおねりやありていとよみしと云ふ
石を物の蓋のやうにおねりやありていとよみしと云ふ
貴人との葬所も墓多し又日本書紀孝徳卷曰王以上之墓者
其内長九尺濶五尺其外域方九尋高五尋役千人七日使訖之下
臣之墓者其内長濶及高皆准於上其外域方五尋高二尋半役
二百五拾人三日使訖云々凡王以下小智以上之墓且用小石を

○安國寺
かひのちを以て繪描塚穴の事ハ二卷よりして

別は肉村に在り本尊薬師如来楠木の槽に入り十三神眼立あり
像ありと云曆應二年己卯豫州安國寺建立是利將軍義満の
寄附状あり其文曰

寄進伊豫國安國寺國內餘戸庄并吉原郷地頭職松崎漢
等事
右為當寺領令寄附之状如件

嘉慶二年二月廿八日 左大臣源朝臣
又河野通之の寄附状あり其文曰

安國寺の事
吾全書

伊豫國餘戶庄大野森山先知行分所領之事
上方為寄進成御教書上者早自寺家所知以之可有違
之狀如件

應永四年十月十八日

河野六郎通之

安國寺衣鉢客

○星岡

元弘三年二月河野備後守通綱七居次郎共三南朝の御方として
伊豫の義兵を率一時長門探題上野今北條時直星岡に陣所を
構へて合戦の事あり

太平記七卷云土居次郎得能彌三郎宮方三成テ旗ヲアケ當國兵ヲ

○岩伽羅城壘

相附テ佐國へ越ル処ニ去月二日長門探題上野今時直兵船三百艘ニ
テ當國へ押渡リ星岡ニテ合戦ヲ致ス処ニ長門周防ノ勢一戦ニテ負テ
手負死人其數ヲ不知刺へ時直父子行方ヲ不知云々
同綱目云俄々レバ兵物具スヘキ間モ無クメバカ様ニ洛行ヌ時直
父子モ希有ノ命助リテ山林ニ身ヲ隠シ今治浦ヨリ小舟ニ乗テ主従
六人備後ニ着テ夫ヨリ長門へ下リレトナリ

志津川村より天文二十三年九月當城主和田三河守通興武威
ヲ募リ河野屋形を蔑如ノ命ヲ發ス事アリ仍テ湯月館より平岡
大和守兵將トシテ俄々當城を攻メれば通興自殺寸其後一族和田

大衛門佐と云人移住せし也二名集見之

大熊城墟

則之内村在り戒能伊賀守通運當城は猶舊久万山大除城
主大野紀伊守利直と合戦の事あり

二名集云大野進兵圍大熊山城固クシテ抜ク不能ハス空ニク解圍

退去城兵勝ニ乘シ追北甚急ナリ寄手失度亡命其教ヲ知ラス

時二剣山城主黒川對馬守通俊大野ニ與カレテ寄手中ニ在ガ被射馬

遁去ルヲ得ズ則之内村ニテ自殺スト云齋院瀨ト云処ニ有莖松樹ヲ

植テ黒川松ト云

福見寺

山内村在り俵飛山と号く真言宗本尊觀世音法道仙人草創多

古開基の地ハ今の本堂あり十八町山上在り二王門方六河野氏造立也

俵諺集云法道仙人天竺人也或夜紫雲に乗ル我朝は奉公播磨國

法華山に住り常々法華經を讀誦し秘法を修し天竺より持來

物ハ千手觀音銅像舍利寶鉢等也大化元年八月船頭藤井に就テ

鉢を乞ふ藤井公采あるとて施す時鉢空しく飛去數多の木

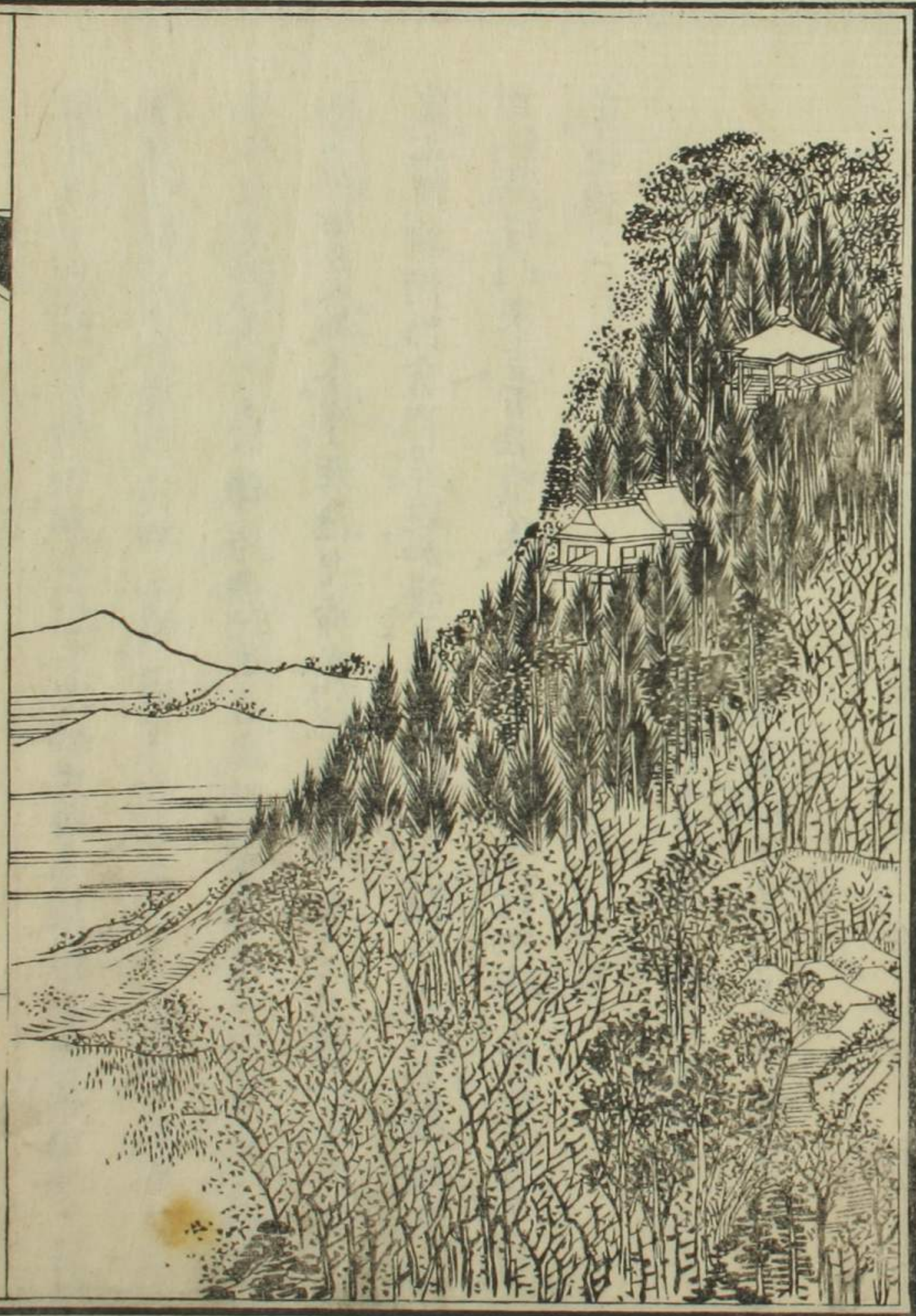
穀鉢を逐て飛去藤井大驚き科と謝せし米穀飛歸る事

奉の如く唯一俵南河上は落川是より此地福人多し此故り

由りて俵飛山福見寺と名づく

元享釋書曰大化元年秋八月船師藤井載官租而過道飛鉢乞供藤井曰御

愛媛の白雲山



白雲山

福見寺



愛媛の白雲山

白雲山

高麗

竜之岡

尉精種不_レ皇私情鉢便飛去於_レ是乎船中群禾隨鉢飛連猶雁陣入山中
 藤井大_レ駭馬奔到庵所悔謝乞_レ憐道笑而諾言已米石如_レ別飛歸其禾
 千石無有遺失只其一俵落南河上自_レ茲此地富人多矣浴号_レ米階土村又
 曰米田藤井入都奏事孝德皇帝大_レ加感嘆五年五月上不豫診治弗_レ瘳乃
 宣_レ龙撲射阿陪倉内召道加護道入宮持念玉體平復六宮羅拜止_レ宮七
 日弘演釋門奥上君臣嘆美云道多_レ宮精舍諸州往_レ而在_レ今存者稱
 道遺德

按此事怪_レむ一_レうれ_レも神仙昔_レより人多_レ和漢史傳或_レハ此事
 よ及_レふ己_レの寺辨_レよ負_レせ_レ其徳を称_レするよ_レい_レの今_レひて辨_レ
 う_レい_レと_レ一

○伊豫郡

舊事紀五卷曰物部伊與連

同七卷曰武國凝別命伊與御城別添御杖君

又曰十城別王伊豫別王等之祖

同國造本紀曰伊余國造志賀高穴穗朝御世印幡國造同
 祖敷析彦命兒速後上命定賜國造

又曰仲國造志賀高穴穗朝御世伊豫國造同祖建借馬命
 定賜國造

日本書紀景行卷曰次妃阿倍氏木事之女高田媛生武國凝

別皇子是伊豫國御村別之始祖也

同五十一年又妃吉備武彦之女吉備穴戸武媛生武鼓王與十城

別王弟十城別王是伊豫別君之始祖也

大成云此伊豫國ハ伊豫郡とあり久昧國造小市國造奴
麻國造風早國造あり比自郡と云あり吉野國初瀬國を
どの類あり

和名抄郷名

神前郷

五川郷

石田郷

崗田郷

神戸郷

餘戸郷

昔ハ此六郷あり今ハ三拾四村と云れり也

- | | | | |
|---------------|--------------|---------------|--------------|
| 一坪村 七百二十石余 | 中河原村 八百石 | 大間村 二百五石余 | 保免村 六百七十七石余 |
| 南江領村 五百五石余 | 北江領村 三百六十五石余 | 高柳村 五百七十五石余 | 庄之内村 六百七十五石余 |
| 余戸村 千三百六十石 | 垣生村 七百七十二石 | 北河原村 五百四十石余 | 松前村 千九百一十石余 |
| 黒田大溝村 四百廿二石余 | 釣吉村 八百三十三石 | 北神崎村 八百五十五石余 | 南神崎村 二千廿三石余 |
| 神崎出作村 二百五十八石余 | 徳丸村 八百三十三石余 | 八倉村 四百二十石余 | 横田村 八百石 |
| 黒田村 六百七十七石余 | 上三谷村 千四百石 | 下三谷村 千五百三十五石余 | 五川村 千四百廿七石余 |
| 稻荷村 三百五十五石余 | 市場村 四百九十九石余 | 尾崎村 二百三十三石余 | 中村 三百一石余 |
| 采湊村 五百四十四石余 | 本郡村 三百五十五石 | 下唐川村 二百廿石 | 大平村 七百三十九石余 |
| 三秋村 百七十七石余 | 本林村 三百六石余 | | |

總高二萬四千拾壹石八斗六升七合

○伊豫豆比子神社

延喜式に伊豫郡伊豫豆比子神社とありぬ。其詳を伊豫社
ハ神崎村に在り俗に親王宮と云近世誤りて伊豫神社とせ然
ども伊豫神社ハ即久米郡の伊豫村神社と別々伊豫神
有べきあり。○は神崎村の正しく伊豫豆比子神社あり著
猶此事ハ伊豫村神社の正しく委しくして

二十四社考云伊豫神社在神崎村土俗誤稱親王宮所祭伊
豫津命也。○は暗に伊豫豆比子神の御事とすあり

按豫章記に孝靈天皇第三皇子諱彦狹島命伊豫皇子
ト稱ス詔有テ伊豫国ニ下レ玉ヒ即伊豫郡神崎庄ニ御座ス後三宮

ト崇メ奉ル今親王宮ト云即當家義祖宗廟神也。○はよりて
此神ハ彦狹島命と祭りて云説りども信

古事記傳廿二卷云日子寤間命書紀ハ彦狹島命と云此書
紀の御名ハ論りて彼景行卷に五十五年以彦狹島王拜東山道
十五國都督是豐城命之孫也然到春日穴咋邑卧病而薨之是時
東國百姓悲其王不至竊盜王尸葬於上野國有て下總國に狹
嶋郡ありて此地名を以て後稱へり御名をへ然も彦狹嶋
命と申ハ此佛世の皇子ハ非ざる寤間と名の似りて依りて
ものより此記を正しす。○は姓氏録垂水史の系も豐城入
彦命男彦狹島命と云るも男と云ハ書紀に孫と云る也

されどもつとよまれ是又此御代の皇子より
たれば日子寤間命も彦狭島命も伊豫より下り給へし事あり
必謬あり

又按書紀景行卷云次妃阿倍氏本事之女高田媛生武国凝别
皇子是伊豫國御村別之始祖也同五十一年又妃吉備武彦之
女吉備穴戸武媛生武鼓王與十城別王弟十城別王是伊豫別
君之始祖也と有るは此二王の肉を和らと謬りて彦
狭島王とよびあり

又按国造本紀より味國造神魂尊十三世孫伊與主命定賜
國造と云此伊與主命即伊與豆比子又ハ伊豫神あり

○松前城壻

松前村の海濱に在り文祿四年加藤左馬助喜明朝臣の築給
はるる後慶長七年松前城を温泉郡勝山に移し修了即ち
の松山城是なり

○金蓮寺

松前村に在り本尊薬師如来後堀川院寛喜三年の草創より
て唐僧明海上人開基也といり
程諺集云後堀川院御悩の時明海を召れ修法有れば御悩
平愈し玉りて賞ありて永世此地を賜り伽藍を建立せり中
松前住人武内正勝と云人法華經と一字一石より書寫し新田と云

附セリ文祿四年加藤喜明朝臣此寺（ひき）其跡へ招前城（きり）と多事
絵（このころ）此寺古ハ性尋寺（きんじん）と云々也此村玉松山十二光院金蓮寺と改む
四方八町免許地（かきま）あり大木林彦七盛長の鬼女（きよ）又遭ハ此寺（この）
事ありと云へり

豫陽盛衰記云歴應五年ノ頃ナリ當国久米郡ノ住大木林彦七
盛長（たか）と云者有レカ尊氏將軍先年九州ヨリ發向ノ時細川定禅（ていぜん）キ
ニ属シ兵庫ニ於テ烈シキ働有レ故其賞トシテ大庄二三箇所宛行ハレ
一族悦（よろこ）ヒノ餘猿樂興行有ケル此盛長ト云者本土佐ノ奥ニ三月テ日夜
山林ラ家トシ鹿猿免ラ獵テ業トシ飽マテ剛強ニシテ不敵也真崎ト云
所ニ宅有テ遙カ山側ニ杖敷ラ構ヘテ郡下ノ老若男女群集シテ見物

セントスん頃彦七モ猿樂能ノ人数ナリケレハ夜ヲ以テ出ケルガ羊（ひつ）途ヲ
ヤレト云声シケレハ家頼ノ者走リ近付見ハ深田中ニ倒レ正氣ヲ失テ
居カカルノ故其日ノ猿樂ハ止ニケリ漸ク介抱シテ館ニ連帰リケリ元来
シタカ者ヲ苦シハセガリケレ其語ル有様虚実難分是程ニテ催シ充故
日ヲ替テ猿樂始ケレ氏彦七ハカリ目ニ見九由ニテ色々奇怪ノ事ヲ申セリ
後六夜番日番ヲ付ラ守リ居ケルモケレ又又有様甚多カリシ其後ハ唯狂
乱ノ如クテ殿内華モ難叶終ニ貴キ僧ヲ招キ大般若ヲ真讀シテヨリ成（なり）
長気色本復シテ怪キヲモナク成ニケリ此事太平記ニ詳ル也
玉生八幡宮
松前村ニ在リ宇佐ノりの辻座也と云別當金蓮寺昔ハ出作三

○ 百貫庄内六十三町社領あり由俚諺集より

流宮

高柳村に在り祭は詳あり川の洪水を此社下に流せしとて揚々勸請せしを流宮と名く萬治四年今の鳥居を建く五社大明神と額を掛り俚諺集より稻荷ノ末社とてまつしハ狐と云

○ 日招山殿並玉院

本寺薬師の基作不動明王ハ空海彫刻也と云古ハ本堂九間四面鏡天井画竜ハ狩野某筆鐘樓中門四天王門其外殿坊ハ竜泉坊西林坊淨蓮坊世音坊是景坊善渡坊道源坊常願

坊長泉坊不動坊林月坊等也舊ハ大伽藍のす河の邊より洪水は佛殿廊下も流て残り物ハ本尊天井の鏡板卧龍画大般若箱二三合建保三年源家友書寫して寄進せり今ハ本堂も茅葺と成りぬ河野通宣免許状有り薬師寺開基長圓坊と云名由云云

長圓寺保免境ノ事任先規ノ名東限西道南國祭屋敷を限西ノ樋の裾道を限北ハ提井迫道を限所お定也然ハ諸公事寺停止仍如件

永禄二年十月七日 通宣在判

○ 日招八幡宮

新編 武蔵野 御影 卷四

新編 武蔵野 御影 卷四

別當西林寺 俚諺集 佐木高綱 當國を領し 多村建させし由見
えしと 豫章記 當國守護と佐木三郎盛綱 被補しりて

○ 高忍日賣神社

延喜式 伊豫郡 高忍日賣神社 乃祭は 或書 天牟羅
雲命三世孫 天忍男 妹忍姫 之者 盖此歟 乃御社 徳丸村の民家
の側 之を 誤りて 若宮八幡 之と 近世改く 復舊と云

○ 伊曾能神社

延喜式 伊豫郡 伊曾能神社 乃祭は 八廿四社 考 天照大
御神 乃 新居郡 伊曾乃神社 同神也 乃御社 八南神崎
村の岡上 之を 俗に 吹上大明神 之と云

○ 稱名寺

吾川村 在り 相傳 貞永年中 蒲冠者 範頼 之葬所 處ありと
禁下の池上 五輪塔あり 又一寸八分の黄金の毘沙門有り 先年
寺内 榎木を伐て 是を 切りと 俚諺集 是れ也

按 範頼ハ 頼朝 將軍の 為ニ 罪を得て 伊豆國 修禪寺ニ
て 自殺す 之ニ 然るニ 此寺ニ 葬る といは 傳へ 實ハ 難を
遁れ 河野氏ニ 寄居 といふ 一 亦ハ 秘傳 といふ 一

○ 重信川

今出川の川上 重信 之加藤 喜明朝臣 松和城 在 乃家
臣 足立 羊右衛門 重信 之 人 乃流を 付 土堤を 築 之

新編 武蔵野 御影 卷四

新編 武蔵野 御影 卷四

寺名つゞぎ又左馬助殿堤として今も残り上木林松川と云ふ源は
砥部十六谷の流れてあそぶの池も潤すゆゑ丸太河あり
又谷川中は温泉湧出て疾病を治すゆゑ里人語りぬと俚
諺集よびし也

○郡中

米津村と吾川村との間にある市所是なり此は山中より出法の
産物伊豫砥と云ふ砥部の陶器其外材木綿砂糖等寸
産て此郡中より出してゆかぬ船馬等とて諸國に運輸せり
因て旅客の往來常より之を商家も又日々繁栄し人烟ま
す盛なりと云

○扶桑木

本郡村離山より掘出す一種の埋木あり俗相傳上古扶桑と云
大樹有るとその根を中より朽残りありて仍て扶
桑木と名を鑄て印鈕と造る刻を印筆の帯付と名す
木質堅緻色深黒く光澤有り最愛玩す也

昔蹟考云古事記より和泉國の大樹又肥前國の大樹
との書紀風土記より昔大木の有ると後枯て根の
今まで残るものも所んりて大樹ありハ史も記すべ
きを見えざるはうらみ
按白國は埋木と出す陸奥國遠隈川より掘埋木

此類あり是皆地氣の然りしははく彼扶桑と云木の根
 のよみ限りし又大洲領海中より扶桑木と出可尤大也
 海底より取らば初ハ和よりや風よりなれば碎て緻密な
 るび久く陰處に置く乾きて後より出せば堅硬き事
 石の如しと云

○浮穴郡 宇城安奈

續景後紀三卷曰伊豫國人浮穴直千繼同姓真德等賜姓春
 江宿禰

三代實錄曰貞觀八年冬十月廿三日伊豫國浮穴郡置少領一
 負

按職員令曰大郡上郡中郡下郡等大領一人少領一人と有
 て小郡は六領一人主帳一人也此郡は小郡とて領一人あるべきや
 中郡下郡等と准へて少領一人を加給ひしと云
 ○和名抄郷名

井門郷 拜志郷 荏原郷 出部郷

若八此四郷より今八九拾九村に分ちり

井門村 五百七十石 土居村 千石 森松村 七百六十石 上野村 六百九十石

西野村 二百六十石 荏原村 七百五十石 淨瑠璃村 四百九十石 久谷村 五百八十石

窪野村 三百一石 東方村 千六百石 津吉村 七百八十石 中野村 二百七十石

小村 千六百石 高井村 千八百三十石 河原分村 三百三十石 野田村 千二百三十石

牛淵村 九百八十石 田窪村 八百九十石 志津川村 七百八十石 見奈良原村 七百七十石

吉久村 二百四十石 下林村 九百八十石 上村 八百八十石 上林村 六百六十石

北番村 九百八十石 東川村 三百三十石 井内村 三百五十石 七鳥村 二百八十石

有枝村 五百一十石 畑川村 七百三十石 東明神村 五百五十石 管生村 五百八十石

西明神村 三百石 入野村 三百石 久萬村 二百五十石 野尻村 二百石

露峰村 三百石 大川村 三百一十石 日浦村 二百九十石 黒岩村 二百七十石

仕出村 百石 澤渡村 九百三十石 黒藤川村 二百三十石 久主村 百五十石

柳井川村 二百七十石 西谷村 二百九十石 父川村 二百五十石 上川村 二百七十石

小屋村 二百八十石 北平村 五百石 中川村 三百五十石 本川村 五百一十石

町村 四百五十石 南山村 八百八十石 葛井村 五百七十石 立石村 四百六十石

寺村 四百七十石 下田渡村 八百四十石 中田渡村 百三十石 日野川村 百九十石

大平村 百三十石 二名村 六百四十石 薄木村 三百六十石 上田渡村 七十九石

出淵村 九百八十石 高市村 二百六十石 中川村 百三十石 栗田村 百九十石

玉谷村 百四十石 總津村 二百九十石 多居谷村 百三十石 猿谷村 百一十石

三津野村 九十三石余
 大平村 二十七石余
 岩屋口村 八十五石
 千足村 百十七石余
 宮内村 三百三石余
 麻生村 九百八石余
 川井村 百八石余
 七折村 廿八石余
 北河毛村 百九石余
 大南村 二百廿六石余
 大角藏村 三十九石
 外山村 七十七石余
 五本松村 百八石余
 川登村 百六石余
 万年村 二十石
 鷓崎村 四十五石余
 兩澤村 三十三石余
 上唐川村 七十石余
 佐礼谷村 六百廿九石
 高川村 六十五石余
 上灘村 六百六十七石余
 高岸村 五百十三石
 大又保村 二百六石余
 石置村 三百四十九石余
 林鹿村 廿三石余
 串村 四百五十五石余
 堺村 七十二石余

○ 大宮八幡

總高三萬五千六百五拾六石六斗壹升一合

上野村に在り建立詳あり安藝國嚴島明神に參詣し筆此宮
 小宮引しりりりり嚴嶋の社司より證書あり

當社先例に筋目も懇望し奈一筆令啓達作平岡殿
 御洞に事外國に旦那衆系訪し砌神前之宮川同敬申
 取次任往右儀赦免状如件

永祿十二年三月廿日 棚守修理大夫房顯判

在在物中民部大夫殿

寶物ハ佐々木四郎高綱の鞭りりり俚諺集又見し
 八塚
 在在村の田中在在相傳右衛門三郎と云者八人の子と失ひ

懺悔一々年行々々ハ子の境ありと云此の石寺の
奈々委一々々

○伊豫砥

砥山とやま若々々砥石とぎしを出寸伊豫砥いよとぎと名つく名産也此石の出る
山やまをすつく砥部とべと云又近世此山やまを掘出寸石いしを陶器
を制衣せいい一諸國しよこくは商しやう少すくの影かげ一信しんは砥部とべ焼やきと名く

延喜式民部云伊豫国鹿草五十枚鹿皮十張砥二百八十顆大豆
十六石海藻根十斤那乃利曾五十斤苕子十枚樽二合胡麻子五合
将酒大豆廿二石隔三年進将酒大豆五石
又云凡諸國貢調庸者云伊豫限二月但宇和喜多兩郡

限三月 伊豫砥五顆

同内匠寮云伊豫砥其數隨用

○淨瑠璃寺

淨瑠璃寺じやうるりじ村むら在り本尊ほんそん藥師やくし如來にょらい行基ぎんぎ作しやう藥師やくし一名瑠璃光
如來にょらい之のばやや寺てら名な負おのせせととるる一四國しよこく順拜じゆんぱい四拾六番しよじふぱん札所さしどころ
あり當寺たうじは平岡遠江守へいおかゑんしゆの墓はかなり

○西林寺

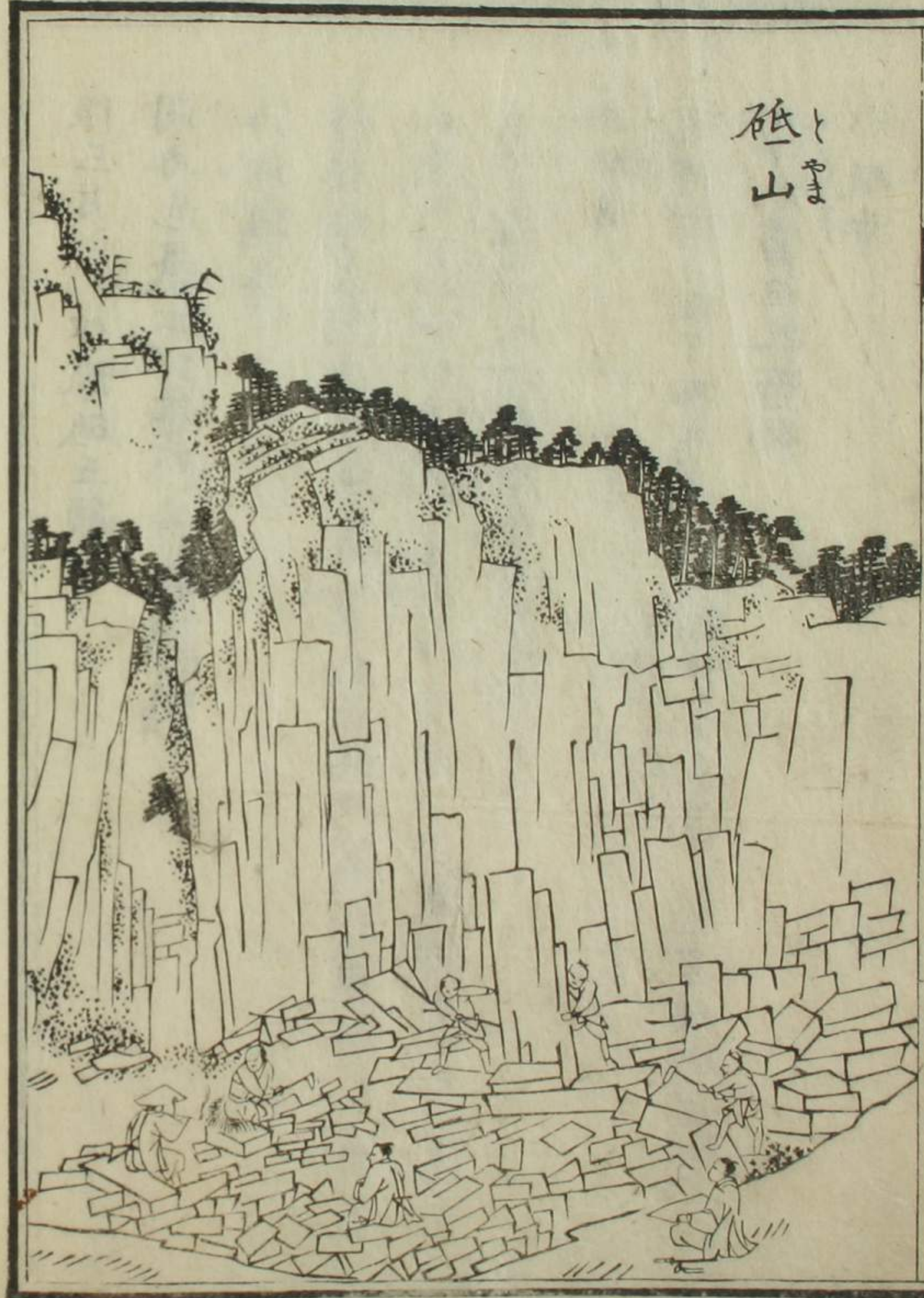
高井村たかいむら在り本尊ほんそん十一面觀世音じゆんめんくわんぜいおん立像たつざう三尺空海くわんざい作しやう四國しよこく順拜じゆんぱい
四十八番しよじふぱんの札所さしどころ也

○八坂寺



愛媛乃面影卷四

十四 石の音



砥山

愛媛乃面影卷四

十三 石の音

湯谷山と号す八坂村に在り本尊阿彌陀佛坐像三尺惠心僧
都作四国順拜四拾七番の札所あり

○久萬山

荏原より東南に當りて高山なり羊腸の險路を經り三里
許より山頂より一世界なり久萬と名く人家数多建并て衣
食は之より寸田畑うち開けて尤豊饒の地なり近世茶と多く
産はる外材木硝石椎草等の産物多し一區の仙境と云へり

○菅生山

久萬町の東に在り名處あり
藤原為頼

明玉集

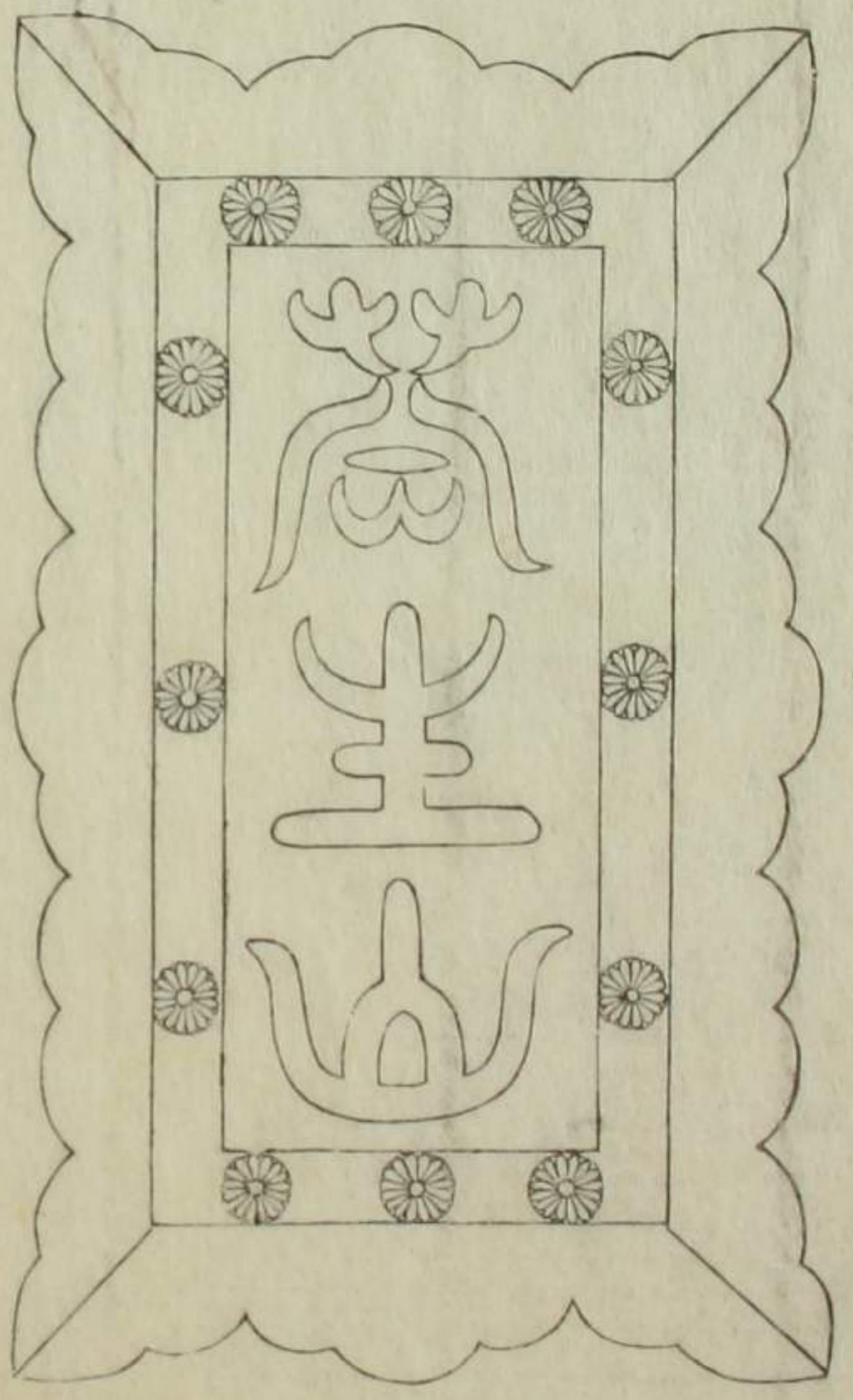
荒紫へまうなひ伊豫の海より雲くふ山をさして

朝あきよち地をくるとは伊豫路あり昔生るの山に中れられたる

○大寶寺

菅生山に在り本尊十一面觀世音立像四尺三寸百濟國より渡り
來り此の天竺佛より云文武天皇大寶年中に建立せり仍て
大宝寺と号く二王門の二金剛八運慶作菅生山の額に後白
河院宸筆也仁平二年焼失せりと保元二年再造せり嵯峨
大覺寺宮住職せり勢給ひり射勅命に依て大覺院と号し
とりの四国順拜四拾四番の札所あり此寺昔八天台宗あり
しと空海奥院を開基あり時真言宗に改む舊八十八坊

後白河院宸翰樓門額縮圖



有りと今ハ大坊中坊東坊西坊定泉坊十輪坊東角坊新坊西林坊釜田坊理覺坊石垣坊の十二坊残り

○大除城壘

東明神村に在り河野家の將大野山城守直昌と云人天文の頃土佐一條家の兵を防ぎ新に城壘を久万山に築きて大除と名く敵兵の害を除くの義よと云り

○岩屋寺

蒼生山より七十五町東七鳥村に在り奥院是より弘仁六年空海開基本尊不動石佛也四國順拜四拾五番の札所有り空海の教也

谷ありき岸の朝霧海はゆる松竹を波もあらしむ
 とりふ分のちを海海岸山と名付る由此迄すゞ断崖絶壁
 その風景もひり厳と厳との間もぐる人身を通すや處
 あり俗に迫割と名づく鏢を攀く升るふら此と鏢の禅定
 云二十一級の階子を升りて白山権現社に至る此所は危陰
 此より東をゆる阿波讃岐の海見ゆ又西を望むは和島
 九國の境まで又渡さる岩窟の不動松明を點くと詣り
 仙人堂ハ階子を升りて至る絶壁の頂人の至るごとく
 卒都婆と俗に投卒都婆と名づく其外洞中の舍利塔洞
 中の彌陀佛等つらつらゆるゆる此國第一の奇観

いづれあつた

○ 古岩屋

空海くめ此處を開んとて經營有跡ありと云此所は谷川の
 流を隔てうの絶壁の十五丈二十丈とありあるその上は木立は茂り
 葛紅葉あつたのまじりたりとて守りていふ所は後
 あつた花ひくつたのつら此姿あつた彼岩屋との法師め
 ありゆきと違ふ傍りて眺みぬ

○ 伊豫笹

伊豫國よりよむと出寸名産ありて藤を荒くと編
 了詞花集惠慶法師の歌よ



岩屋寺

投早都婆



あはれいふゆゑにうらめしき屋いふく我をよびしるる
扶木集

とて源氏物語枕草紙等も出てあまふ多し
竹ハ細く長し但諺集は二名村より出た
尋へて又川村の村長某の云らるる実ハ露崎より出た
定ざりて戯しよあふ

此書の草稿と云洲人武田維楨にせられたり

○羅漢墳

小屋村の山中に存る窟を俗に羅漢穴と名く奥に十休佛と
て羅漢の居る状に似たり
集は浮穴と云郡名も此穴より出たり
去久元年辛酉十月此墟に入多村の日記後人の病も
十九日天氣好く穴を案内者雇ひて小屋村の村長
立出溪河より一里許より大穴を
て一人の案内者召出たり
下りて此穴を茂らゆ中より大穴の
下りて此穴を茂らゆ中より大穴の

下あむやて窟ありる前は掃きやりの物より半破りり案内者
 のくく此穴は必大風吹きて人を入らば構へりて何者
 破りて入神ありたり此穴は燈火燃らしめて入る十方を
 くりはすこし踏りて行かれり漸く度へまぐ山骨もよみ
 石の下は海の流れに随ひてありてなほあり或はハ
 鑛掘出しむ此穴とて入り下り一面の白石を以て
 ハ馬も騎つぬる廣地あり家も建りぬる清く
 鐘乳石とてこの夥しくつきや穴の内蝙蝠多しこれを寒空
 此はともなふとて飛得守一丁を以て踏岩と云り依り
 肉をとりと云とぞ此は上下より満ちたりてはひて海に流る

あり又いと廣くあり或は逆穴とて井とのまきしんやうより下り海に
 ありと穴ありあり者より誰も入らざる此踏岩より廿四五間あり
 ゆけり千體佛とて鐘乳石の付りる石左右よりつともあり是れ
 是れ海の五百羅漢とて物に似たりはるる名何れありとてこれより四
 五十方より行く鳥居若と云りて鐘乳石の大き柱ありあり
 上より下まで降りつては石右より左より四十間ありは
 中川に云は有くあり深く満ちりて上りの踏岩の如くして是れ越
 ぐべし此れよりありては行く者ありあり心細くあり
 此れより入りては此坑に入りては蠟燭燧を以て必し之れ
 ありては燈火の消るぬるは命に本の危しありあり



山を穿て坑内と
見し圖

後爰乃面山卷四

三十一
白の吾の巻



羅漢壙
ウゑん

後爰乃面山卷四

三十一
石の巻

於て本のはよ還りつゝ日光とては蘓生とてあらせり此の如く
 嬉々然と世に有るをくくひりて

○新田明神社

大平村に在り、膝屋刑部卿の男式部少輔義治朝臣の靈を祀は
 たり又社より己方より四松と云所に義治朝臣の墓ありと云

按日本外史曰建徳元年正月義治収兵於武藏上野與上杉朝
 房戦復不克走匿信濃不知所終と云後義満購天下新
 田氏族を索し河野氏と頼て伊豫よりこれ給ひりて
 又温泉郡にも新田明神の社ありと云

○當歸

大平村より中山に越えぬと大寄坂と云此を近世當歸と云
 殖て諸國に商賣頗上品あり俗に伊豫當歸と名く

按伊豫國往古ハ藥種を多く出せり今ハ甚稀あり
 延喜式典藥寮諸國進年科雜藥伊豫三十二種

- | | | | |
|---------|--------|---------|---------|
| 獨活 十七斤 | 牛膝 | 白木 各六斤 | 桔梗 十斤 |
| 茯苓 | 漏蘆 | 杜仲 三斤 | 苦參 十斤 |
| 人參 九斤 | 木櫛 二斤 | 藁本 二斤四 | 細辛 |
| 括樓 | 大戟 各三斤 | 芍藥 八斤 | 石南州 四斤 |
| 升麻 | 天門冬 各斤 | 續斷 二斤十四 | 瓜蒂 二兩 |
| 薯蕷 八升六合 | 麥門冬 | 車前子 | 蕪菁子 各三升 |

- 附子 二升
- 杜荊子 二升
- 蛇床子 五合
- 麻子 三升
- 桃仁
- 胡麻子 各升
- 支子 二斗五升
- 蜀椒 四升

硝石

野尻村多硝石と出寸制衣して諸國に商ふ俗に久万硝石と名く
又古昔伊豫國より朱砂と出寸多事あり見たり附録寸
續日本紀曰大寶二年九月乙酉令近江國獻青金伊勢國朱
砂雄黃常陸國備前伊豫日向四國朱砂安藝長門二國青
金綠青豐後國真朱
同天平神護二年淨足自言難波長柄朝廷遣大山上安陪
小殿小錄於伊豫國令採朱砂云々

煙草

按伊豫國往古朱砂と出寸事著し然れども近世絶て所
在と云ふは實に悖じ小野蘭山の本草譯説に朱砂近
年和産り然れども藥肆に出す程に及寸大和吉野川
上に出寸上品也豊前草本村も出す若水先生の時吟味
ものありて黒赤色にして下品也ありて物産志に
著ハカと掲ぐと搜索るは必なるべし

川登村より出寸はの多葉粉風味勝るとは川登多葉粉と
稱せるは外出洞村等も葉粉多し又守摩郡上山より
多く出すと云

○喜多郡きんた郡

三代實錄曰貞觀八年十月八日己酉割伊豫國宇和郡為宇和喜多兩郡

延喜式民部曰九貢調庸者長門國限明年四月伊豫國限二月祖守和喜多兩郡限三月

又曰未進調庸物伊豫國宇和喜多兩郡明年六月晦日云扶桑畧記廿五卷裡書曰延長五年正月九日頃年之間海賊未

隨追捕去年之末盜運伊豫國喜多郡不動三千餘石大成云續紀類聚國史文德實錄寺子不動倉所又三

和名抄郷名

代実録は不動穀とよみのり此不動三千餘石と云不動穀
をうらまへり

○和名抄郷名

矢野郷

久米郷

新谷郷ニヒヤ 尔比也

芳ハ此三郷ありと後世八拾三村に分ちり

中山村 二百六十石

川中村 二百六十石

大瀬村 六百五十石 川崎村 百五十石

宮谷村 百七十石

横山村 百九十石

植松村 百七十石 椽谷村 六十八石

中津總川村 八十二石

鳥坂村 六百六十石

中居谷村 三百五十石 北表村 三百二十石

只海村 二百十石

村前村 四百六十石

重松村 三百二十石 弦卷村 四十二石

奈良野村 余

名荷谷村 四百八十石

宇和川村 四百六十石 四分市村 五百七十石

森山村 百五十石

成野村 三百五十石

大久喜村 二百七十石 宿間村 三百五十石

大神村 七百六十石

知清村 六十六石

五百束村 五百石 立山村 四百五十石

代衣口村 百八十石

川内村 百三十七石

論田村 二百四十石 城廻村 二百五十石

北山村 三百五十石

内子村 六百八十石

古田村 五百五十石 菅田村 五百七十石

宇津村 三百五十石

大竹村 三百三十三石

北多田村 三百七十石 松尾村 百七十石

藏川村 二百三十石

梅川村 百五十石

長谷村 百四十石 鳥坂村 百五十石

正信村 百六十九石

桑野村 百四十石

野佐木村 百四十石 黒木村 九十三石

大洲村 四百八十石

柚木村 二百七十石

中村 百十八石 田口村 百七十石

若宮村 十五百三十石

一本村 六百五十石

徳林村 千四百三十九石 上新谷村 十五百五十石

下新谷村 九百六十石

意木村 百五十石

藤縄村 百六十石 柳澤村 二百八十石

急後乃面杉巻四

三十五 吾菴蔵

田所村 三百六十名余
 今坊村 四百五十五名余
 戒川村 三百七十五名余
 手成村 三百七十五名余
 宇山村 六十八名余
 春ヶ村 十三十三名余
 多田村 百十三名余
 五郎村 八百名余
 阿藏村 十七名余
 高山村 百三十五名余
 上須戒村 四百七十五名余
 出海村 三百六十六名余
 上土谷村 三百四十四名余
 櫛生村 三百六十六名余
 下土谷村 百七十五名余
 此木村 四百九十九名余
 下須戒村 三百四十八名余
 八多喜村 百五十五名余
 米津村 二百六十五名余
 加屋村 二百七十五名余
 上老松村 七十四名余
 大越村 百名
 黒田村 百名余

總高 三萬三千九百三十九石七斗七升

○内子

大寄坂を越中山川中等を経て内子に出此處多く櫛疏

○鳥坂城塙

を晒して諸國より商人よりつとめて常々賑わし
 河野氏の將村上河内守吉繼と云人の城跡あり
 残太平記曰永祿十一年八月土佐一條頼房卿伊豫國に發向鳥
 坂城ヲ攻動ス雷ノ震フガ如シニ長曾我部此處に隨順シテ家臣
 江村備中守三三余騎ヲ屬テ頼房ニ加勢ス都合其勢八千余騎
 七月三日土州幡多ヲ討立テ豫州境奥郡ヲ攻順へ鳥坂城ヲ圍ム
 此時宇都官西園寺三千余騎ヲ馳加ハリ日夜急ニ攻寄タリ城ノ
 守護人村上河内守吉繼驚キ急キ河野通直ニ注進ス通直時ヲ
 延ス三千余騎ヲ打向一條勢ニ相對ス河野ハ毛利一族完戸隆家婚

ナレバ隆家三千余騎ニテ直通馳加リ續つづキテ小早川隆景浦兵部丞
井上伯老ハハキ守五千余騎ヲ屬テ河野屋形ノ陣ヲ補佐ホサセシメ云々城主
村上カ一族能島久苗島因島ノ海賊吉繼キツナシガ急難ススヲ救ニテ兵船
五百艘加勢ス依テ之宇都宮西園寺引去ケル頼房モ郎等諫しテ
八月下旬鳥坂ヲ引去奥伊豫ノ村里ヲ放火シ六ヶ所切取是ヲ
軍ノ利トシテ土州へ帰陣有云々

○新谷

元和三年加藤左近大夫貞茂朝臣大洲六万石を賜たまハシテ後次
男織部正直恭朝臣新谷一萬石を分知ぶんち寸すんと俚諺集り見みレト
其後代々相續つづキ給ヘリ南みなノ川が北きたニ高山有テ海岸が隔へテ

事二里許自然要害の地あり近世蠟紙等の産物多く一ひとノ頗盛
あり殊ことニ此邊田野開ひらケ喜多郡中尤豊饒の地あり

○十夜橋

徳森村ニ在リ空海修行の時此橋下したニ一夜を明あク冬ニ寒風
ハ吹ふク一夜ひとよト十夜とよト明あクら多おほクの故ゆ事ことあり一ひとニ名
集あリし傍かたニ大師堂有テ香花常とこニあリ

○比志川

南ハ土佐境ま切坂きりノ流ながヒ西宇和郡松葉のしりりと流
ルる一ひと同どうニあ合あテ比志川ひし入大洲城北きたをありて長濱ながニあリ
遂つひニ海うみ入常とこニありて往ゆ来きスる十里と及およブと云い鯉こ年ねん

魚等多し此國第一の大河なり

延喜式主計曰伊豫國短鯨鮪鮫者其塩年魚貽貝鮓鮓

○大洲城

舊名大津とて天正の頃近守都宮遠江守居城ありと後大洲と改めし元和三年より加藤侯代は是を領し給ふるに則ち能志川の流を引て城郭の遠望殊よめざり大津大洲と志川よれり名あり

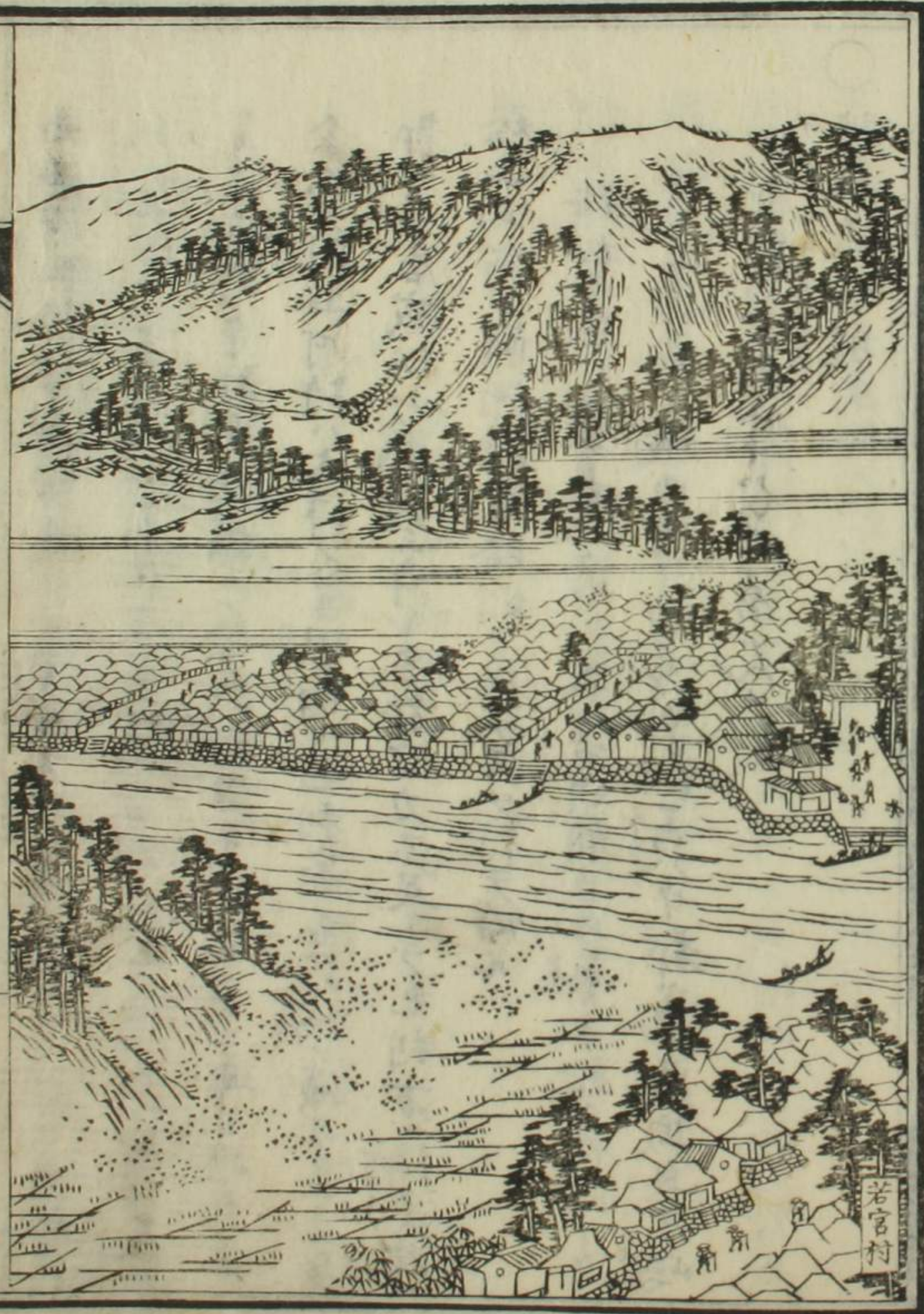
河野家傳記云秀吉公戸田民部少輔ニ拾万石ヲ賜ヒ大洲城ニ居ラシム民部少輔殿ニ病死其後池田伊豫守秀政ニ賜ハル秀政朝鮮ニテ死去民部少輔跡ヲ藤堂伍渡守へ下サル佐渡守跡ヲ富

田信濃守知照ト藤堂宮内宣吉トニ下サル其後伊達侍從秀宗加藤龍近大夫殿子息出羽守殿へ下ル

武鑑云天正年中守都宮遠江守同十二戸田民部少輔後藤堂和泉守高虎領之慶長十二腋坂中勢少輔安治同冷路守安元元和三加藤龍近大夫自奉以後代に領之

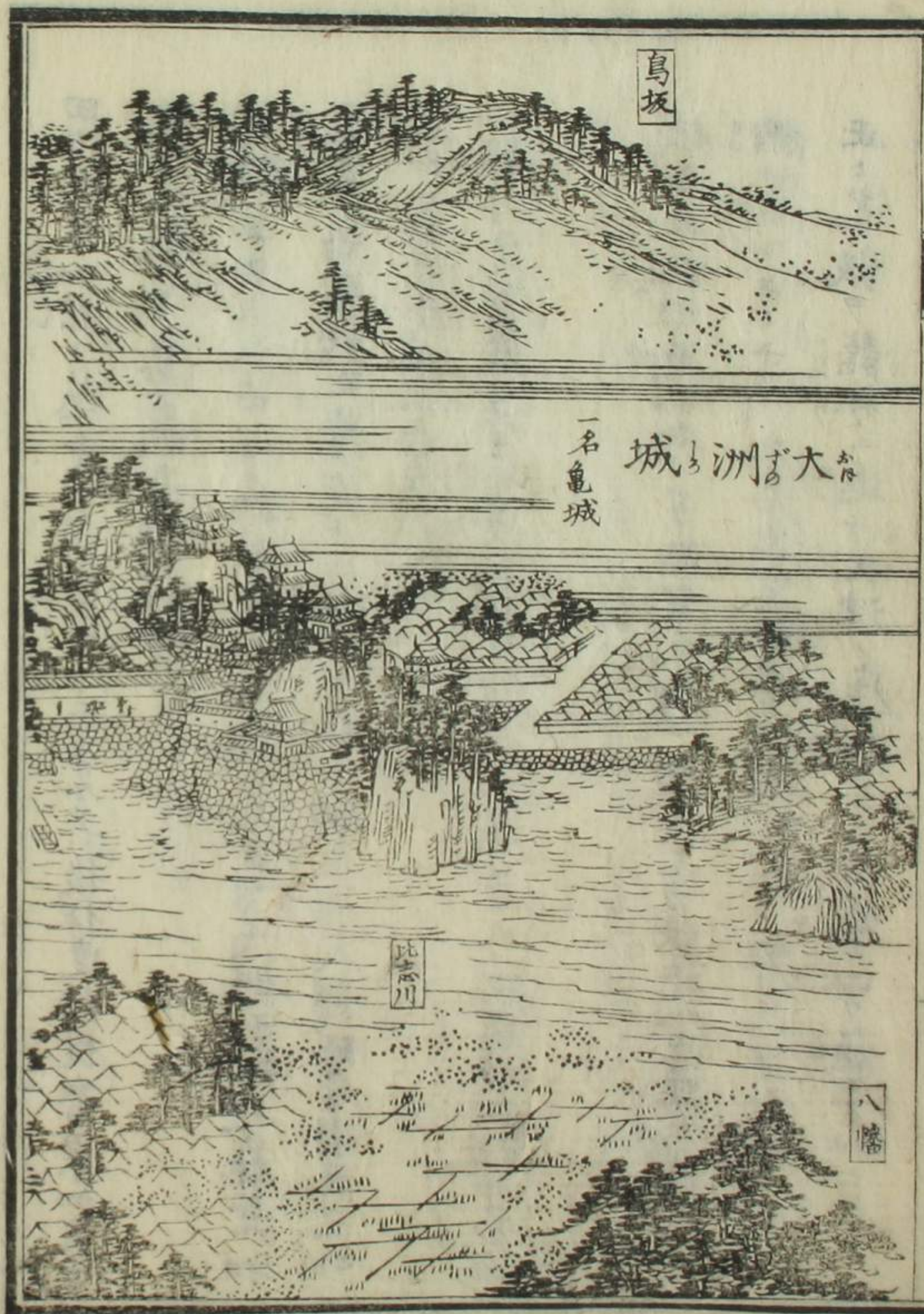
日本外史曰慶長十四年九月從腋坂安治于大洲富田知信于守和嶋

残太平記曰斯ル如ニ守都宮元綱が郎等菅田隼人正猶之大津城ニ楯籠ル云々古川元春出雲伯耆因幡美作ノ勢三万餘騎ヲ率シ正ニタレ鼓ヲ龍旗ニ進テ大津ノ庄ニ推來ル其勢山ヲ朋スガ如シ云々



若宮村

鳥坂



大洲の城 一名 龜城

比良川

八幡

南海治乱記曰、津宮遠江守豊綱が臣菅田治部大夫直之近郡ヲ
 取テ自立セシ、復テ欲シテ土佐方へ服従シ、土州ノ兵ヲ假テ河野領ヲ
 是ヨリ河野守都宮鉾楯ニ及テ河野方ヨリ毛利家ニ通シ、援兵ニ万
 余人ヲ引出、河野ハ大津ノ菅田ニ向ヒ毛利家ノ兵ハ滿ノ濱ヨリ上リテ守
 都宮が居城松山城ニ攻寄ル、守都宮力不足シテ毛利方ニ降、大津
 松山兩所ノ戦、河野方勝利ヲ得テ兵ヲ引テ歸ル

按松山城ハ慶長八年加藤喜明朝臣の築キ給ヘ、是ハ夫
 夫ヨリ以前ノ城の有一事トシ、夫ハ都宮が居城奥居嶋
 ヲ誤リテ松山トハリシ、其ノ事

○地藏嶽城墟

大洲村在リ一名亀城大野上總介直行ト云ノ城址也ト云
 二名集曰、當城主大野氏通志於長曾我部元親、向北河野館、仍為
 誅伐、天正元年三月十八日、河野近江守通吉自進發于喜多郡大
 野山城、守直昌曾根丹後守宣高等別而欲顯志、負不相約于旗
 本、而向于地藏嶽城、大戦、直行失防、戦術遁去
 武田敬孝云、地藏嶽ハ即當今大洲城是也、城下の淵を地藏
 淵ト云、古昔岩上ノ地藏の石佛を置、其後正覺坂ニ移すト云
 亀城ト云、大洲城の別名あり
 按今の大洲城ハ地藏嶽の古城址より、築キ給ヘ、是ハ
 然レバ二名集ト云、此の大野直行之人ハ即菅田直之ヲ殘太

平記の猶之も同人あり一此人ハ大除城主大野直昌の一族そ
菅田氏を稱するものハ菅田村より出り

○八幡宮

大洲城より十町を西の西北の山除ニ在り何頃の勧請ありと
云う可毎年九月初日と祭日云々数日市立り云々大洲産土神也

○塩賣の淵

大洲城東北志川の上ニ在り昔塩賣商人長途の疲労も常極
の生淵と云ふをこ側ニ即ち煮くろの跡下の淵と云ふ大地出て
塩賣を呑んとす時此者の佩り刀のつら抜きて大地を過
大地恐怖てあけし沈みし後刀ハ元の如く鞘ニ収りぬ大木林

彦七盛長是を見て彼刀を初王々々塩賣是をハきりて盛長
は授けり盛長所持の名剣是を今も仍て此所と塩賣の淵と名
つと俚諺集に見えり

○金山出石寺

日土土谷上須戒三箇村の境よりて宇和喜多兩郡ニ渡り然れど
寺地ハ喜多郡ニ属し本尊千手観音地藏の石佛地より
湧出より依て出石寺と名く云

縁起畧曰元正天皇御宇養老二年戊午夏山壑震動一光明
赫奕し時一人の獵師鹿を逐て此山に入然り地列岩巖開て
千手観音地藏二菩薩の石像儼然とて湧出り給り云々

奇異の思ひを、忽ち箭を捨て、突心して遂に堂宇を建立す。
ついで初ハ雲岬山と云ふを空海後ニ金山と改りて云

或人云此山の北西より近世銅を掘出せり此邊は金氣多
し此石佛の光明赫奕と云ふもの自然の金石あり云々

かかれ思ふは空海の金山と改り即此をいふは石佛
今ハ叔して見ると許す後人考訂す

寶物ハ鐵塔古鐘古金宝釵其外佛画多し

按堂之側ハ懸るは古鏡四方ハ佛像有て文字あり銅色老
て自然の光澤あり是必三韓より獻する天竺物あり

○長瀨

大洲城四里をり海濱あり比志川の流此處より海に入来穀乃
出入魚塩の運送す此所を船にて城下ハ輸寸尤便利あり
是よりて人家繁栄して頗盛なり珠は近世蠟紙等の産物
多く諸國に運漕する事多し此海濱より

○矢野神山

歌枕秋寐覺は伊豫國の名所とせり和爾雅三才圖會皆同
然れども其所詳あり古歌多し

萬葉集十卷詠黄葉

妻隱夫野神山露霜爾爾寶比始散卷惜

新勅撰和歌集

鎌倉右大臣

厚考て多紀相げの病雲よ矢野の神山より付よる
新千載集 常盤若井入道前太政大臣

秋と之ばゆや鹿の妻うけ矢野の神山を流る
續後撰集 從三位行能

梓弓矢野の神山春うけてうけハネよ多れいよる
玉葉集 入道前太政大臣

つゆさら春うけよ良士此矢野の神山霞多るい
壬生集 從二位家隆

つゆさら矢野の神山まきよひゆる屋れ高よ花を吹る
草庵集 頓阿法師

秋ゆふ矢野の神山を流るよ流るもるさみりて多
冠辞考曰矢野神山和名抄又出雲国神門郡八野伊豫国喜多郡
矢野備後国甲双郡矢野播磨国赤穂郡八野あれよとてを詠む
よび後世の國分名所抄よものよ伊豫と誌しれ例のむあは
舊蹟考曰八幡瀆よよゆよ小高き崗ら其上よ八幡宮あせや
是を矢野神山也と説られ信ら也又宗祇法師が伊豫国を
よらひ何と據とよいゆらうの八幡大神も式よ見えす
祭始よいと上代の事よりよはよ神山を古くよるよ
万葉略解よ矢野神山和名抄よ云これ何處よあ
とるよれと矢野をいれ神山の事ハ心アづり川とと聖神僧

の勝地吐懐篇より出雲神門の八野と云はる神社なりと云ふ事
よといはれり神名帳より出雲國神門郡八野神社なり是れ也
伊勢國度會郡矢野村より神山有と云ふ事ありん定じ

按万葉集よりあふ矢野神山ハ出雲國神門郡よりなり
これ先哲已に伊豫と定かむ事な後世の事也

西務より伊豫の古根の嶺ありて其の言よりハ矢野の神山
ありて詠く伊豫と定む事多しと云ふ事井入道ハ西園寺家の
祖ありて伊豫と定む事多しと云ふ事或人の言よりハ夫聖林ハ今ハ
出石の山といふ地より湧出ると佛體ハ即上代の神像ありと
云ふ事猶考るべし

因云万葉集の妻徳ハつまらぬと訓發きと後世誤りてつま
らぬといふ事あり多し今ハつまらぬと訓發野神山の又の
冠辭の如くありん

○大豆

大洲城邊水田稀にして畑多し古より大豆と多く産せり
延喜式民部曰伊豫國鹿茸五十枚鹿皮十張砥一百十顆大豆六十石
海藻根十斤 那乃利曾五十斤 苕五十枚 樽二合 胡麻子五合 将首大豆
三十二石 隔三年進將首大豆五石

○紙

伊豫國紙を漉出すは多し半紙ハ大洲と名産とす世ハ大洲

半紙と云色雪白ろくろくして厚あつく硬かたく又奉書紙ほうしょしは俗ゆふに伊豫

奉書と名くう磨郡新居郡等より出するもの最上品さいじょうひんあり

延喜式民部下云伊豫國筆フデ一百管 檳榔びんろう二枚 牛皮牛皮三張

斐紙カミ麻マ一百斤

同主計上云伊豫國中男作物黄蘗木百五十斤 紙 胡麻油 砥

短フシ鯨クジラ 鮫サメ 煮鹽年魚いりしほアユ 貼貝イカ 鮫サメ 海藻根 海藻 雜海菜

爰媛面影四卷終

